

会 議 記 録

高松市附属機関等の設置、運営に関する要綱の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	令和7年度 高松市美術品等収集審査会
開催日時	令和8年2月17日(火) 午後1時30分～午後3時
開催場所	高松市美術館 1階 講堂
議題	(1) 収集対象美術品の審議について (2) 答申について
公開の区分	<input type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input checked="" type="checkbox"/> 非公開
上記理由	審議内容に契約相手方の個人情報が含まれるため、高松市情報公開条例第7条に該当、及び公立美術館の購入価格の公表は市場の取引価格に影響を及ぼすため)
出席委員	植松委員、岡本委員、大場委員、北岡委員、森委員、吉川委員、渡部委員
美術専門家	河本信治氏、潮江宏三氏
傍聴者	なし
担当課及び 連絡先	美術館美術課 823-1711

審議結果

議題(1) 収集対象美術品の審査について

事務局より収集候補作品38点の選考及び評価について審査した結果、購入、寄贈候補作品の全てについて収集は可であると承認した。

・委員

今回、映像作品を収蔵されるということだが、デジタルデータでコピーできるものを収蔵するという点について教えてほしい。

(事務局回答)

今回購入予定の購入作品は、版画作品のようにエディションナンバーが作家によって付されている。その内の1点を所蔵、展示できる権利を購入するということになる。

・委員

毎年この審査会に感動させられている。質の高い作品を所蔵していることが、新しい購入や寄贈につながっている感じがして、作品が作品を呼んでいるように思う。またコレクションとどのように組み合わせる新しく紹介するか、が意識されていて、過去、現在、そして未来をつなげてコレクションしていることがわかる。

審議結果

私は病院でアートを扱う仕事をしているが、芸術には「死」がないと感じる。病院ではどうしても肉体の死があるため、死をまた違った解釈で受け止められる手段として、芸術が必要だと感じた。

・委員

大学で勤めており、子どもや学生と関わることが多い中で、失敗を恐れて、すぐに答えを求めていることを、最近の風潮として感じる。今回、作品を見てすぐに答えが出ない、逆に問いかけられると感じる作品が多いと思い、今の若者、子どもたちに見てほしいと思った。鴻池朋子のベンチの作品は、見るだけでなく、座れる、体験できる作品であるため、よりアートを身近に感じられるきっかけになるとよいだろう。

・委員

平子作品は、国内外で人気が高く、なかなか美術館で収蔵できない状況であり、今回予算内で購入候補と挙げられたことは、学芸員の方の努力の成果である。すでに収蔵している作家の作品についても、漫然と収集するのではなく、新しい手法や素材の作品や、新たな視点から選ばれている点が評価できる。寄贈で作品が集まることについては、御遺族らとの良好な関係性を構築していることがうかがえる結果である。

特に大木裕之の映像作品だけでなく、絵画や素描を収蔵できることは重要であり、作家が亡くなり、今後再評価が進む中で、今回収蔵した作品は研究の基盤となるものと思う。

DVDの映像作品の収蔵については、データが失われてしまわないように、保管やバックアップに十分気を付けていただきたい。

・会長

この意見に関連して、デジタルデータの保管について、どのような対策を取られるのか事務局にお聞きしたい。

(事務局回答)

今回の収蔵作品に関わらず、デジタルデータで保管する作品については、ここ数年で保存方法を様々に検討している。バックアップデータを取ることにについて作家と取り決めることはもちろん、DVD等のメディアの寿命を把握して、コレクションしていくことが近年特に意識されている。

・委員

素晴らしい漆芸作品を収集できていると思う。寄贈された、近代の藤川黒斎、蘭斎、そして現代の山下義人の漆芸作品を見て、同じ香川漆芸の「蒟醬」で表されたものだが、技法や素材から時代の特徴を感じることができた。

審議結果

現代美術では、1人の作家の作品を数点収集することによって、多面的に捉えることができる点が良いと思った。

・美術専門家

収集候補作品を見て、美術館の日々の活動が実を結んでいると感じた。少ない予算の中で、作家との関係性の中で良品がコレクションできたように思う。

大木作品が多く収蔵されたが、大木の作品は変わったものも多く、美術館の展示にはそぐわないような作品も多いが、メタストラクチャー（対象を一段高い視点から俯瞰する構造）的な視点があり、言葉や視覚を再構成するような紹介ができると思う。学芸員の腕のみせどころであり、どのように紹介されるか楽しみである。

・美術専門家

まずは、漆芸の優品を購入、寄贈で収蔵できたことを高く評価する。現代美術作品も多世代にわたる作家の作品を収蔵できており、その点も良かったと思う。

石田作品は窓と絵画がテーマだが、私などはアルベルティの言葉「遠近法とは窓を通して見た現実である」を思い出す。古典絵画では縦横比が2：3だが、石田作品はスマホと同じ短冊形。石田はアルベルティに言及しているようでありながら、違うことをしていて面白い。様々な問題をはらんだ作品なので、そうした点を作品解説として掲示していただけるとよい。

議題（2）答申について

市長から諮問にあった、令和7年度高松市立美術館の収集対象美術品の選考及び評価について審査した結果、購入、寄贈候補作品の全てについて、収集は可であると、別紙のとおり、2月17日付けで市長に答申することを決定した。